2019年度 休眠預金活用事業

「地域支援と地域資源連携事業」

～困難を有するこども若者その家庭の課題を地域ぐるみで解決する～

事後評価報告書

2023_05 ver.

公益財団法人　長野県みらい基金

はじめに

原点に立ち戻る
2019年度資金分配団体申請 様式2事業計画書初版

支援と地域資源連携事業「困難を有するこども若者その家庭の課題を地域ぐるみで解決する事業」で申請した。
当時の事業計画書は自由書式で、申請する事業により解決したい課題（社会的ニーズ）に対して、「こども若者が抱える困難は複合的で重層化している」とリード文があり
「地域のこども若者、その家族が抱える困難は、もちろん貧困に起因するものもあるが、引きこもり、さまざまな障害、家庭機能の劣化、地域支え合いの低下などその要因が複合的、多様である。
特に長野県は若年層の自殺率は全国一と、厳しい状況で、自殺に至る原因は、まさに上記のように様々な困難の重層から生じていると考える。
当県はそれぞれの地域が山岳や河川に囲まれ殆どが中山間地である。そこには、いわゆる都市部における困難を有するこども若者、その家族の課題の解決策とは異なったアプローチの必然性が当法人の調査、活動で見えてきた。
つまり、それぞれの地域特性を理解し、資源を活用した課題解決が必要であり、効果的である。
今回の当法人の提案内容においても解決すべき諸課題もそれぞれが密接、重層的に関係しあっているので、複数の課題解決を上げた。
そういった背景も踏まえ、諸課題の範囲を決定した。」とある。

コロナ感染症から始まった事業の変遷

複合的、重層的な困難を解決する、実行団体の事業内容は、JANPIAや評価関係者が言う、まさに「バラエティ」にとんだ、多様な複合的な計画、手法の7つの事業が始まった。

はじめに

居場所づくりができない

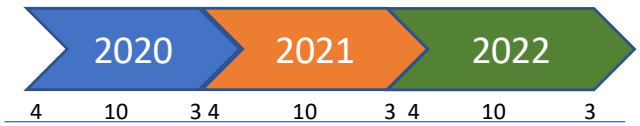
それぞれが、制度では届かない支援を、引きこもり、不登校者、障害者、困窮者など、多様な困難へ、多様な対象者へ、複合的、重層的な課題へ取り組む事業となった。
それは、農福連携であったり、新たな支援場所づくり、人形劇というアートを支援ツールとしたりと、居場所形成が大きな共通点であった。
そこに舞い降りてきたのが、コロナ感染症という、その危機対処法もわからないパンデミックだった。
未曾有の混乱のなか、多くの居場所生成はコロナ感染症の前で、経済構造の停滞による資材機材の流通の停滞もあり、事業の遅延、方法の見直しに迫られた。

コロナ感染症拡大が生んだ届ける支援：アウトリーチ

呼びに行って、誘って、連れてきて、その場所の機能を使って支援をする。
その形成しようとしていたモデルが根底から否定された７つの事業は、
結果的には、出来ないことを無理にするのではなく、異なる経路で支援を接続することで、より成果の上がる＝アウトカムが生まれる、設計、実行へと変化成長していった。
予期せぬ類を見ないパンデミックが、予期せぬ成果へと道筋をつけたといえる。
そういった目で、パンデミック、事業計画、実行形態の変化、中間評価での振り返りと事業の見直し、それぞれの実行団体の成果への道筋の変遷と、牽引し対応し協調していった伴走支援の足跡をこの評価ではたどっている。

はじめに

実行団体の生んだアウトカムと資金分配団体の
伴走支援が生んだアウトカムの相関を見える化する。



その、変化、成果、差異を見える化するため、事業最終３年目には、実行団体代表＋スタッフ、担当PO、評価関係者、プログラムディレクターは、数ヶ月、何回となく数時間に渡るワークショップを行った。
インパクト年表とも呼ぶような、3年間の事業推移と変化、外的要因、対象者の変化、生まれてくるそのプロセスでのアウトカムとリンケージされた資金分配団体の伴走支援の相関図を、3年に及んだ事業を紐解きながら、自己検証、相互検証をしながら、経過した時のマス目にひとつずつ、埋めていきピンセットで糸をつなげるような作業を行った。

事後評価報告書の流れ

基本的には、JANPIAの事後評価に求める項目の順番で記述をしている。
この報告書の大きな流れは

●事業全体像の提示
　　１）支援プログラムの事業開始時の姿
●事後評価の考え方
　　２）事後評価の進め方
●事業経緯
　　３）中間評価時、その前後の事業の変化と背景
●横串キーワード
　　４）伴走支援で生まれたアウトカムの共通項＝キーワード＝横串の考察そして抽出
　　５）インパクト年表（添付の各実行団体の年表も参照されたい）
●アウトプット、アウトカムの提示
　　６）アウトプット、アウトカムの定量データ
　　７）アウトカムの実態（連携＝アウロリーチ）の姿
　　８）アウトカムの分析
　　９）むすび

目次

はじめに	p.2~4	
1.基本情報 2.包括的な支援プログラム概要	p.5~10 p.6~10	●事業全体像の提示 1）支援プログラムの事業開始時の姿
3.事後評価概要	p.11~12	●事後評価の考え方 2）事後評価の進め方
4.事業の実績 インパクト年表と横串	p.13~29	●事業経緯 3）中間評価時、その前後の事業の変化と背景 ●横串キーワード 4）伴走支援で生まれたアウトカムの共通項＝キーワード＝横串の考察 そして抽出 5）インパクト年表
5.アウトカムの分析	p.30~33	●アウトプット、アウトカムの提示 6）アウトプット、アウトカムの定量データ 7）アウトカムの実態（連携＝アウロリーチ）の姿 8）アウトカムの分析
6.成功要因・課題 7.結論	p.35 p.36	9）むすび

このノートマークは、そのページの概要、記す考え方や糸口など、補足も含めて記入しました。

1.基本情報

資金分配団体	公益財団法人 長野県みらい基金
事業名	地域支援と地域資源連携事業
事業の種類	草の根活動支援事業
実施機関	2019年11月～ 2023年3月
対象地域	長野県

領域

- 子ども及び若者の支援に係る活動
- 日常生活又は社会生活を営む上での困難を有する者の支援に係る活動
- 地域社会における活力の低下やその他の社会的に困難な状況に直面している地域の支援に係る活動

分野

- 経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
- 日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援
- 働くことが困難な人への支援
- 社会的孤立や差別の解消に向けた支援
- 地域の働く場づくりの支援

2．包括的な支援プログラム概要（公募時）

包括的な支援プログラムとは、資金計画と事業実施にかかる経営支援等の非資金的支援とを一体化し、その支援への対価や方法を取りまとめたものである。本事業では公募時に以下のプログラムを策定した。

中長期アウトカム	長野県7地域において、困難を抱えたこども若者、家族が孤立を感じない地域・社会になる。
支援対象者	支援団体・地域産業・文化振興団体・地縁組織
直接受益者	困難を抱えたこども若者及びその家庭
事業概要 公募要項より	●困難をかかえたこども若者とその家庭（こどもの貧困、経済的困窮、障害、引きこもり、家庭機能の困難）、孤立の可能性を持つこども若者、支えきれない家庭などを支え、安心して居ることのできる場所を作る。 ●長野県各地域の持つ資源（地理、気候、農林水産業、観光業、多文化共生など）を活用、運営してきた地域のステークホルダーと困難を抱えるこども若者、家庭を支援するNPO等の公共的活動団体が協働して取り組む事業とする。（初期投資、運営資金、人材育成、継続準備の仕組みづくりも含む） ●関係する企業や行政、地域の構成団体などを巻き込みながら、他機関連携＝コレクティブインパクトによって地域課題へ取り組む事業体制を推奨する。

支援活動	●いつでも誰でも行かれる居場所ができる ●対象者に地域の特性に沿ったサービスを提供している ●地域の産業と連携し、事業継続の機会ができる ●地域の高齢者の知恵が居場所を支える ●地域の食の循環システムができる	資金的支援
	●地域のステークホルダー、資源等の把握連携への関係性構築 ●資金分配団体により地域支援団体とのコミュニケーション、連携先の選定 ●各地域における支援体制を構築する ●事業継続への道筋を一緒に考える・足りない専門スキルを分析・経営分析 ●いくつもの居場所（拠点）をつなげる+見える化（広報・資金）	非資金的支援

2. 包括的な支援プログラム概要（公募時）

	短期アウトカム	短期アウトカム指標
資金的支援	1. 居場所において、安定した食事提供、学習支援提供を行うことにより、日常生活を送る上での重層的な困難を軽減する。	①居場所来所者の満足度（アンケート調査） ②居場所来所者数（実数把握）
	2. アウトリーチを「参加」につなげ、居場所への来所機会を増やすことにより、地域からの孤立を感じない社会になる。	様々な困難を抱えている人（障がい者、引きこもり等）の居場所来所者数（実数把握）
	3. 作業工程数を増やし（ワークシェアリング的考え方）、就労機会の増加を図ることにより、地域からの孤立を感じない社会になる。	定期就労者数（実数把握） 新規就労者満足度（アンケート調査）
	4. 高齢者の活躍の場を創出し、地域内で高齢者が「担い手」となる。	地域内高齢者の健康寿命（実数把握） 高齢者の満足度（アンケート調査）
非資金的支援	5. 長野県において、実行団体に対してインパクト・マネジメントを行うことにより、地域内での協力者・賛同者が増える。	①実行団体スタッフの人数（実数把握） ②地域ボランティアの人数（実数把握）
	6. 長野県において、実行団体に対して地域産業に関する専門スキルの支援を行うことにより、地域産業の新たな担い手を育成する。	①居場所において行うことができる作業プロセスの創出（実数把握） ②通所作業者の賃金額（実数把握）

出口戦略

- 実行団体に対する連携・新たな資金提供
- いくつもの居場所（拠点）をつなげる+見える化（広報・資金）
- 次のステップへのエコシステム構築 連携セクターの意識改革

2.包括的な支援プログラム：７つの事業概要（事業開始時）

包括的な支援プログラムが実行団体が確定し、各団体の事業、ニーズ、地域の状況が見えてきた中で、より団体の状況に応じた個別対象、事業要素が明確化してきた。　　各実行団体の事業の中核要素

2019休眠預金　支援と地域資源連携事業で「困難を有することも若者その家庭の課題 を地域ぐるみで解決する事業」

事業計画

長野市　食の循環システム構築事業
経済的困窮を食の循環で支援するためのプラットフォーム
困窮者支援を行う県内団体へ食品製造企業等で構成する「食の循環システム検討会議（仮）」を設置し、長野県内の困窮者支援の課題を把握するとともに、食品ロス削減のための仕組みづくり、支援者と企業双方が活用可能なクラウドシステムを構築する

食の循環システムの見える化

長野市　ICT学習支援官民協働事業
千曲市に学習困難な子どもたちの居場所づくりを行い、ICTを活用した学習支援を行うとともに、安心して居ることができる場所を作る。
多機関連携によって引きこもりの若者への職業あっせんや不登校改善を行い、その仕組みをICTポータルサイトにより全国へ発信する。

ICTを活用した学習支援

安曇野市　地域巻き込み型共生社会の実現！
担い手不足に悩む地元農家と協力して、様々な課題を抱える人たちが、わさび田を整備、荒廃農地で生薬栽培を行うことにより人々の生きる自信を育てるとともに、地元産業の保全に貢献する。
安定した収入の確保を目指し、多様性のある働き方を提案し、「新しい雇用のカタチ」にチャレンジする。

農福連携による地域共生
（農家連携、ワサビ、生薬など）

小海町　生きづらさのある市民の居場所づくり
JR小海線小海駅駅舎内に多様な主体の居場所を生み出す。
・中間教室の機能
・小海町在住の児童・生徒を巻き込んだ居場所カフェ
・不登校からひきこもりの状態にある全世代の当事者を対象とした自立支援

駅構内の多様な居場所

茅野市　働きづらさ解消に向けた支援事業
シイタケ栽培を核とした就労前準備支援。
地域資源、社会資源との連携を図りつつ、シイタケ栽培を通して当事者の状況に合わせた就労準備訓練、就労訓練プログラムの実施と地域企業での就労体験、就労訓練を合わせて行うことでの一般就労向けた支援と困難を抱える若者や家族が安心して居られる居場所づくりをしていく。

農福連携による自立促進（しいたけ栽培）

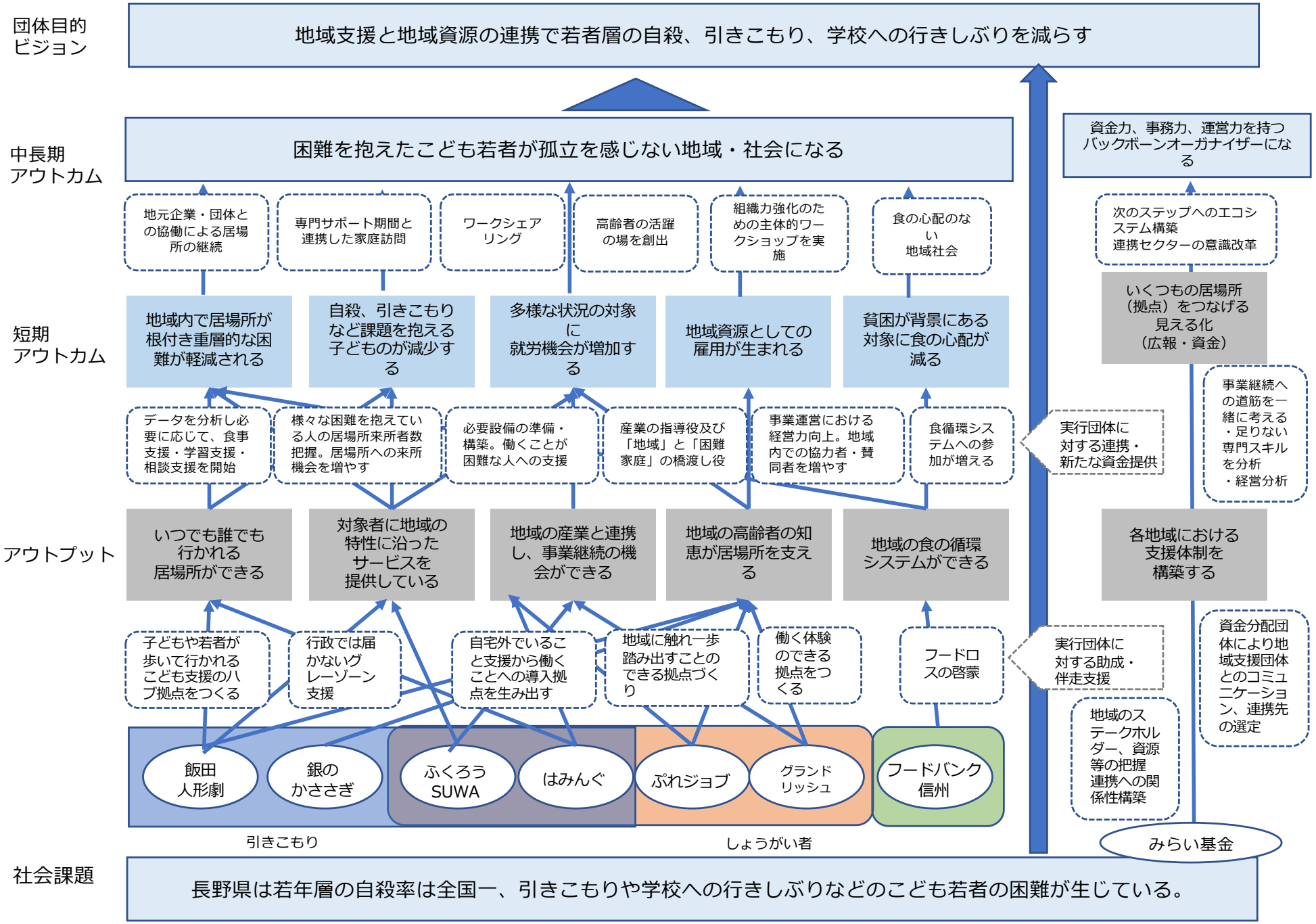
飯田市　人形たちとつくるコミュニティスポット
ー誰もがわいわい集まって人形劇をつくることを支援するー
人形劇という文化財の持つ特性を生かしたコミュニティを基盤とし、年齢や障害の有無に関わらず、人形劇に関心を持つ誰もがここに集まり、上演を目指し、制作に打ち込める場をつくる。

人形劇による子ども若者支援

伊那市　子どもの居場所とネットワーク推進事業
上伊那地域の様々な団体とネットワークを組み、子どもの居場所の立ち上げ支援・相談窓口を設置するとともに、子ども・若者の成長を支える地域力を強化していく体制やシステムをつくる。

居場所づくりと子ども支援ネットワーク構築

2．包括的な支援プログラム概要（事業開始時：事前評価時TOC）



社会的インパクト評価のニーズや課題の分析、実行団体の事業のロジックモデルなどの評価を通じて資金分配団体のTOCを作成した。

3.事後評価概要

多様な事業形態バラエティ型の事業を横串にする、資金分配団体のめざす短期アウトカムとの共通言語を抽出、その定量、定性データをまとめていく。

①どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

考え方と進め方

●7つの事業の資金的支援で生み出されたアウトプット、アウトカムの総和を俯瞰し、実行団体が生み出している変化や成果、想定外の展開による変化を含め、各団体の事業を横断するキーとなる共通項（テーマ課題）を抽出し、カテゴリ化したものを資金分配団体のめざすアウトカムと突き合わせ、整理した。

●並行して、 7つの事業へ非資金的支援で生まれた資金的支援の相乗のインパクト、非資金的支援から生まれた実行団体のみでは生み出せなかったプラスのインパクトを抽出、見える化していく。

アウトカムの総和を俯瞰

資金分配団体のめざす短期アウトカムとの共通項を抽出

非資金的支援の加勢で生まれた資金的支援の相乗のアウトカム

非資金的支援から生まれた実行団体のみでは生み出せなかったプラスのアウトカム

●資金分配団体の非資金的支援から生み出されたアウトカムを測るデータを求める。

各実行団体の事業経過（プロセス）においてのアウトカム、そして介入（非資金的支援）によって生まれたインパクトを見える化するため、実行団体の事後評価時に協働で時系列にそって、活動、アウトプット、アウトカムの関係性を年表化した。

●実行団体のインパクト年表から７つの事業における資金分配団体が志向するアウトカムの次号＝キーワード、共通項を指標化、ボリューム、サイズ、中身から資金分配団体のアウトカムを読み取った・

実行団体の事業成長プロセス（いくつもの活動→アウトプット）から生まれるアウトカムに非資金的支援で生まれた相乗のアウトカム

非資金的支援の加勢がなければ生まれなかった、あるいは、特徴的な（予期せぬ）創生のアウトカム

3.事後評価概要

②どんな調査で測定したのか

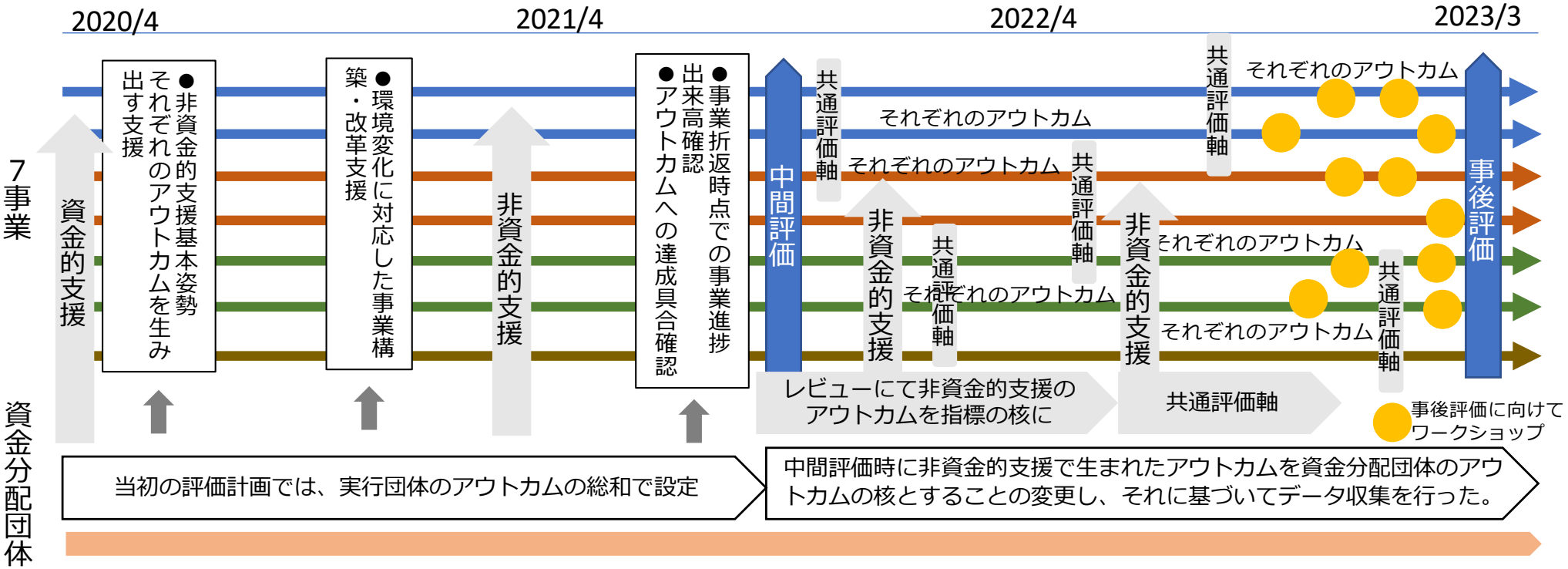
資金分配団体のアウトカムを客観的、相対的、共通言語化し提示するため
プロセスで出現するアウトカムを視認化し分析、抽出した。

進め方

●アウトカムの共通項＝キーワード、共通概念の指標を導く
中間評価時における７事業の俯瞰した評価軸と非資金的支援の分野、種類、手法などを照らし合わせ、連続する経過＝プロセスから資金分配団体の共通項＝評価軸を導き出し、事後評価を実行した。

●実行団体と事後評価をまとめるにあたって複数回のワークショップを行い、共通のアウトプット、アウトカムを確認することで、非資金的支援の実践のプロセスをデータ化しインパクト年表を作成、指標とした。資金分配団体は７つの年表の総括に非資金的支援をプロセスに入れ込み、評価に活用した。

資金分配団体のアウトカム ＝ 非資金的支援で生まれた相乗のアウトカム ＋ 非資金的支援 で生まれた特徴的な（予期せぬ）創生のアウトカム



4.事業の実績

① インプット

項目	内容・金額	
（1） 人材 （主に活動していたメンバーの人数や役割等）	内部：合計 5人（PD1人、担当PO3人、経理1人）／ 外部：合計 4人（評価アドバイザー1人、労務アドバイザー1人、他2人） ／ 実行団体：合計 20人（評価年表作成WS）	
（2） 資機材（主要なもの）	車両、事務所用PC、プリンター、事務机、事務椅子、ホワイトボード	
（3） 経費実績 助成金の合計		
① 契約当初の計画金額	合計 119,479,583円	事業費：70,000,000円 （内訳 実行団体助成金：59,500,500円 ／ 管理的経費：10,499,500円） ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・ｵﾌｨｱｻｰ関連経費：28,000,000円 評価関連経費：6,404,097円 コロナ対応緊急支援追加額：15,075,486円 （内訳 実行団体助成金：12,830,486円 ／ 管理的経費：2,245,000円）
② 実際に投入した金額と種類	合計 119,479,583円	事業費：70,000,000円 （内訳 実行団体助成金：59,500,500円 ／ 管理的経費：10,499,500円） ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・ｵﾌｨｱｻｰ関連経費：28,000,000円 評価関連経費：6,404,097円 コロナ対応緊急支援追加額：15,075,486円 （内訳 実行団体助成金：12,830,486円 ／ 管理的経費：2,245,000円）
（4） 自己資金		
① 契約当初の自己資金の計画金額	合計 4,624,220円	
② 実際に投入した自己資金の金額と種類	合計 4,624,220円	
③ 資金調達で工夫した点	日頃から経営合理化に努め、自己資金を確保した。	

4.事業の実績

中間評価時の非資金的支援アウトカム評価

中間評価時における居場所の設置による波及効果、就労支援の経緯と生まれるアウトカムを確認した。

【非資金的支援】

指標	目標状態	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
長野県において、実行団体に対してインパクト・マネジメントを行うことにより、地域内での協力者・賛同者が増える。	居場所を毎日開所することができるようになる。 協力者、賛同者の人数	評価アドバイザーとの連携による実行７団体とともに評価研修とWSを行い、事業実施の悩みやお互いの情報交換を行った。それにより客観的な自事業の評価の視点が生まれ、団体同士の横のつながりができた。 協力者・賛同者拡大に関しては、実行団体とともに地域での研修会開催、事業の告知等を行い、行政・社協、企業等との連携も進み、確実に拡大している。 それぞれの事業の特定対象者へのアプローチは十分とは言えない、あるいは異なった側面のアプローチが必要なので、実行団体の横連携の機会をさらに作っていく。また、地域事業の多様なステークホルダーとつなげていくことで、地域全体の事業へとしていく。 中間評価に向けて、インパクト（アウトカム）視点で評価し事業の見直し、再構築、編成を組み立てる。
長野県において、実行団体に対して地域産業に関する専門スキルの支援を行うことにより、地域産業の新たな担い手を育成する。	①希望者が全員作業にあたることができる作業工程数 ②長野県最低賃金以上の支払い	農福連携を行う団体のひとつは、アウトリーチにて引きこもり支援を行い、農業体験へと誘って実績を上げている。 また、椎茸栽培では、アプローチする対象者を若者としたが、実際に相談に来る人は、中高年者が多かったことから、若者にこだわらず幅広い年代にアプローチすることを提案、実施した。また、専門スキル支援では、農業団体の連携を活用しながら、農地管理や栽培過程ノウハウのアドバイスをした。 体験就労参加者には少額の謝金支払いだったが、最低賃金以上を支払ったことでモチベーション向上につながり、新たな場へ就労するきっかけとなった。

4.事業の実績

中間評価時のアウトカムの分析

【アウトカムの達成度】

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察
①実行団体の事業を通して資金分配団体が最終的に達成したいアウトカムは達成されたか	①概ね問題なく達成できる見込み	①コロナの影響で事業推進に困難が生じた場面もあったが、みらい基金の支援と、共に対策を検討したことなどによりアウトカムは達成の見込みである
②もたらされた変化は事業の実施に起因するものか	②休眠事業があったからこそ事業の目的とした変化が生まれた。	②短期アウトカムの進捗状況に記載したとおり、この事業により、多くのポジティブな変化が得られている。
③資金分配団体が対象とする地域や分野等を超えて、同様の手法による取り組みが始まる兆候が確認されたか	③子ども食堂や学習支援の取り組みが増えている。	③食事支援や学習支援を行っている団体が、他地域、他分野活動の団体等と積極的につながるアプローチを伴走し、連携した新しい、多面的な取り組みが増えている。
④事業活動から得られている成果の規模や質に対するインプットは、妥当だったたか	④事業実施のためのインプットに対して成果の規模や質は妥当であった	④事業計画に対してインプットはほぼ妥当。ただ、実行団体によっては、人材、専門家の不足が見られ、インプットの活用に工夫が必要な事象もあった。

中間評価時に、事業実施、成果への道筋として、横連携が重要であることを認識した。
団体同士だけでなく、地域の多様なステークホルダーとの連携、協力が事業遂行に有効であり、更に進めていくことを確認した。

4.事業の実績　事業進行～中間時点（レビュー）～事業終了時の変遷

中間評価時以降、JANPIAの評価レビューのタイミングで制作した資料。
それぞれの事業の客観的な現状、課題を提示し、伴走支援の方向性を探った。

2019休眠預金　支援と地域資源連携事業で「困難を有するこども若者その家庭の課題 を地域ぐるみで解決する事業」

状況
課題

長野市　食の循環システム構築事業
経済的困窮を食の循環で支援するためのプラットフォーム
・県内主要ステークホルダーを動員する事業で、特に経済団体に対してのアプローチに手間取った。
・実施主体のフードバンク信州の基盤が事務局長一人に頼る状態であり、システム構築を担う予定だったスタッフも受託直後にやめてしまい、全体像が描けない時期があった。

長野市　ICT学習支援官民協働事業
駅前商業者中心の組織と連携で開始、教育委員会も参加し、対象へのアプローチに期待。
・コロナにおいて、居場所に呼び込むことができなくなり、オンラインでの学習会へシフト。
・情報リテラシーの高い家庭の参加が多く、対象者へのアプローチが出来ていない。

安曇野市　地域巻き込み型共生社会の実現！
・コロナにおいて想定作業の変更、薬草栽培の遅延により、育苗の1年延期。
・リーダーのアウトリーチ型引きこもり支援は評価が高く、行政も委託を始める。
・障害者支援事業（B)も行い、マンパワー不足が見られる

小海町　生きづらさのある市民の居場所づくり
・引きこもり支援、障害者支援、病院、行政といった多様な主体でそれぞれに事業を実施、成果も個別には上げているが、それらの事業の総合的なインパクトが見えてこない。
・福祉分野支援と、休眠事業における目的（駅前の活性化等）の整合性が取れていない状況が見える。

茅野市　働きづらさ解消に向けた支援事業
シイタケ栽培を核とした就労前準備支援。
・コロナで建築資材等の遅延
・市の福祉等担当部署とも連携し、情報拡散を行うも、狙った対象者からのコンタクトが少ない。

飯田市　人形たちとつくるコミュニティスポット
ー誰もがわいわい集まって人形劇をつくることを支援するー
・実施主体は人形劇フェス等の運営が本業で、市内のこども支援関係者も巻き込んだメンバー構成とし、駅裏の一軒家を拠点とし、定期的な人形劇ワークショップを行うが、コロナ禍もあり対象となる子どもたちの参集は振るわずにいた。

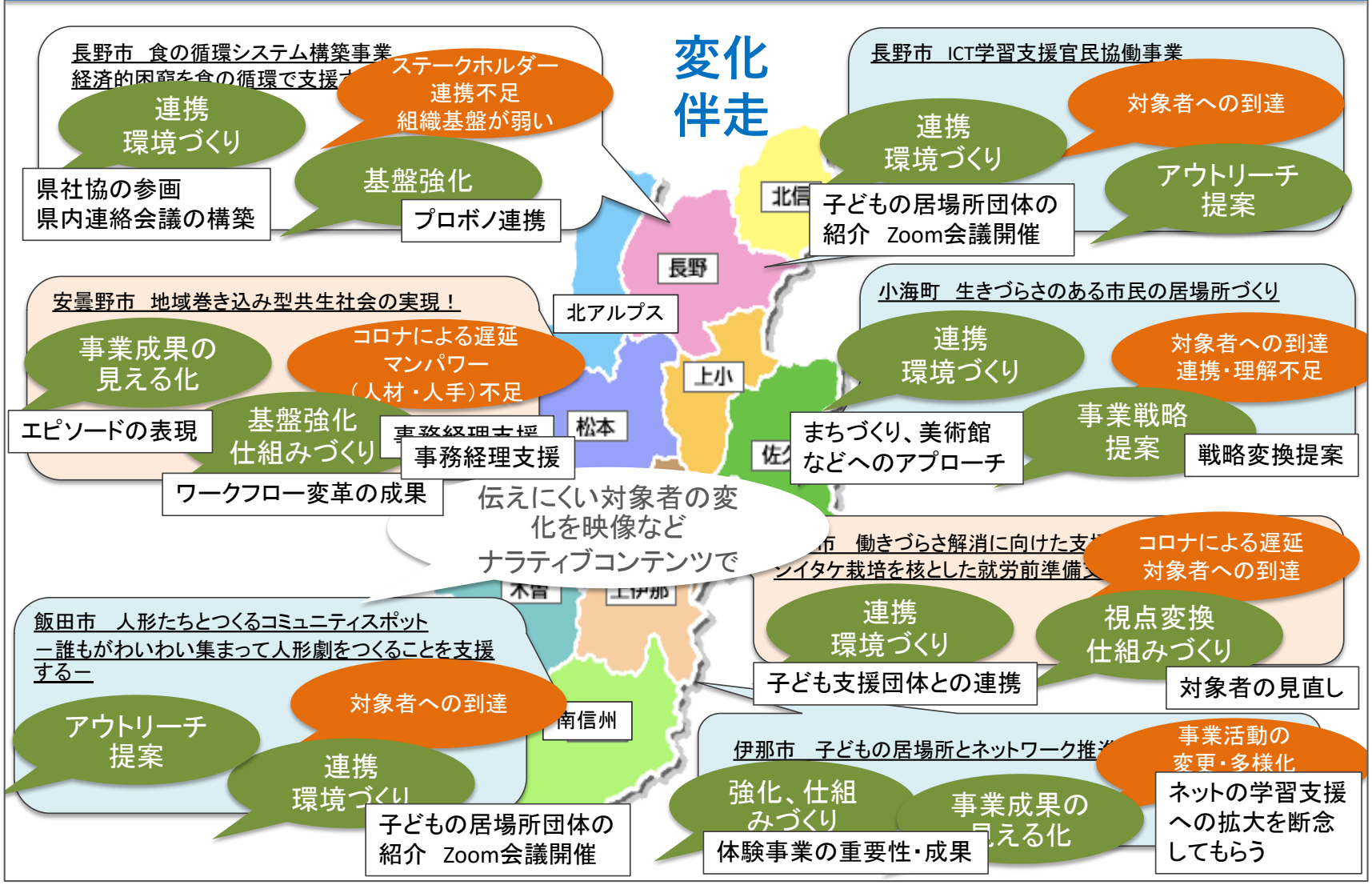
伊那市　子どもの居場所とネットワーク推進事業
・コロナ禍でも居場所を開設し順調に実施。
・事業から生まれる、想定外の活動のインパクトが大きい。
・地域巻き込み力が大きい

＊事業開始からコロナ感染症対策時　2020/4～2021/06

4.事業の実績　事業進行～中間時点～事業終了時の変遷

全ページの団体の状況から、伴走支援としてどのような環境づくりが必要課、その内容の方向性を見出した。

2019休眠預金　支援と地域資源連携事業で「困難を有することも若者その家庭の課題 を地域ぐるみで解決する事業」



4.事業の実績　事業進行～中間時点～事業終了時の変遷

事業終了時、それ以降の出口も含め、事業の成果の上がる、アウトカムを生む支援内容、進む方向を検討、言語化した。

2019休眠預金　支援と地域資源連携事業で「困難を有するこども若者その家庭の課題 を地域ぐるみで解決する事業」

事後出口

長野市　食の循環システム構築事業
アピール：事業継続パートナーの出現
・システムの実装とそれを支える基盤づくり
　→企業連携→運営主体の協業（県社協）
・入口の食品寄贈企業、出口の地区社協等への双方へのシステム前とトライアル後の比較をデータ化し、上記出口戦略の武器とする

長野市　ICT学習支援官民協働事業
アピール：行政連携が生まれる　事業の充実
団体の連携による横展開・連携の実現
・アウトリーチとリアル支援のハイブリット事業への展開

安曇野市　地域巻き込み型共生社会の実現！
アピール：ワークシェア的な新しい働き方
・対象者のナラティブな評価を見える化
　→記録　広報
・困難を抱えた若者が多様な働き方で生きる道を見つける→ワークシェア的な働き環境づくり
　→周辺地域の理解促進
　→農福連携の可能性の増大
→インパクトの見える化とナラティブな評価づくり

小海町　生きづらさのある市民の居場所づくり
アピール：福祉モデルから文化モデルへ
・駅での多様な主体の多様な活動が、地域活性化へのリンケージとなる
→小学生、高校生参加という対象者、主体者の相互乗り入れ的な展開　アートへの展開

茅野市　働きづらさ解消に向けた支援事業
アピール：ワークシェア的な新しい働き方
・事業モデルとして、助成後の継続力の確保
・短時間でのワークをシェアすることで、対象者への支援を継続
・補完する働き方を提案、移行することで事業が成立

飯田市　人形たちとつくるコミュニティスポット
アピール：団体の連携による横展開・連携の実現
・対象者を待っている事業から、アウトリーチによって呼び込む、対象者へ飛び込む事業へ変換
・他の団体と連携事業が生まれる

伊那市　子どもの居場所とネットワーク推進事業
アピール：体験格差への挑戦と実績
・スポーツ、ダンス、調理、製菓等学習支援でない支援の成果
→地域課題を見つけ異なる主体を巻き込みながら解決する手法を生み出す仕組み

4.事業の実績　事業進行～中間時点～事業終了時の変遷

環境、事業、対象者それぞれの変化に対応した非資金的支援。それぞれの事業のモデルの姿、出口戦略、評価共通項目を抽出を模索し始めた。

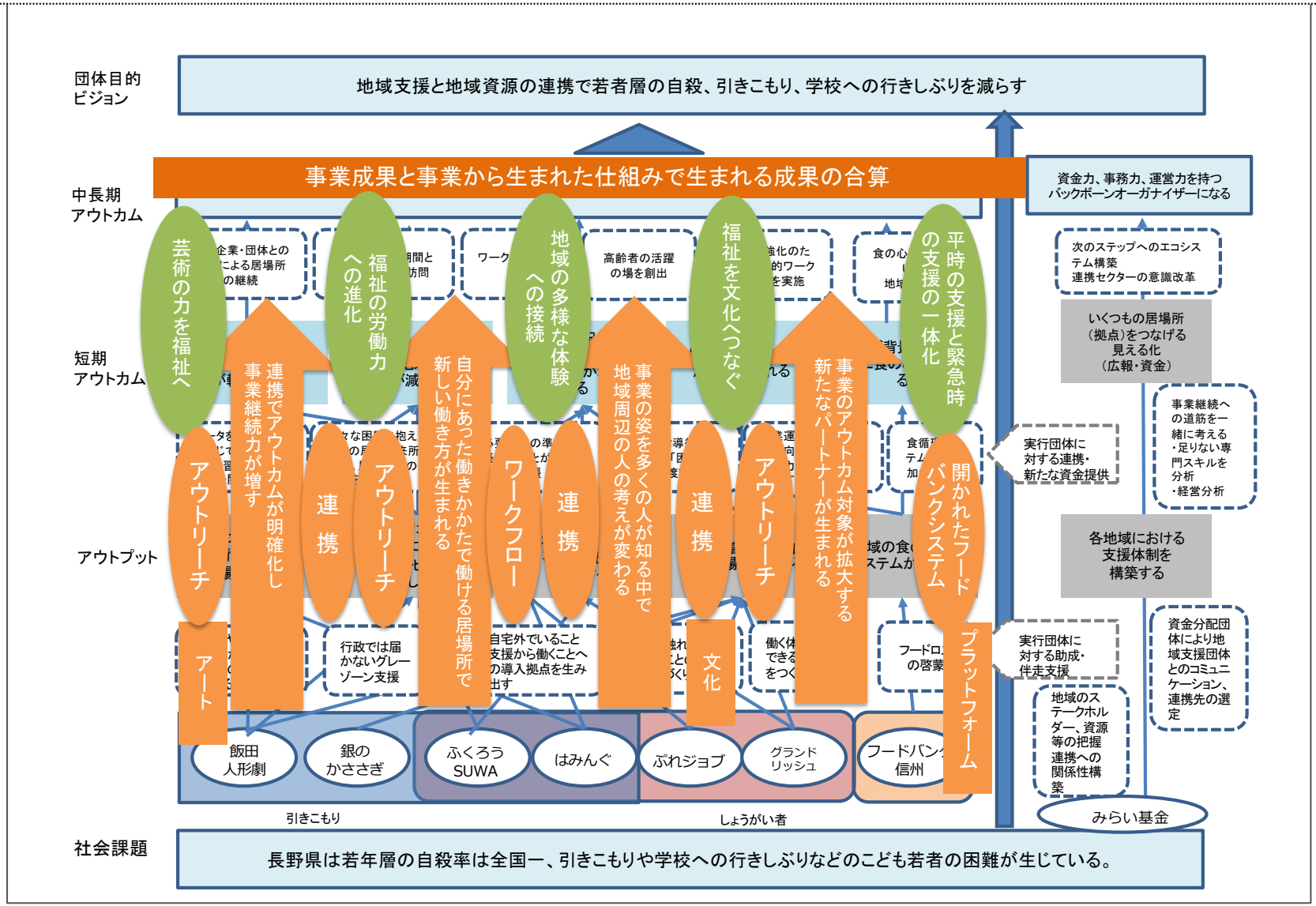
2019休眠預金　支援と地域資源連携事業で「困難を有することも若者その家庭の課題 を地域ぐるみで解決する事業」

出口戦略　モデル創出　評価共通項目

4.事業の実績　　事業進行～事後評価に向けて　　年表への橋渡し的な整理

調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

●アウトカムの総和、短期アウトカムとの共通項目を抽出、その定量、定性データをまとめていく。
●並行して、 7つの事業へ非資金的支援の加勢で生まれた資金的支援の相乗のインパクト、非資金的支援から生まれた実行団体のみでは生み出せなかったプラスのインパクトを抽出、見える化していく。



4.事業の実績　インパクト年表①

事業実施
伴走支援
伴走支援

●障壁に対して関係性構築、支援者投入により打開策を生み出す
●障壁に対して共に検討し打開策を生み出す（環境づくり）

公益財団法人 長野県みらい基金

地域支援と地域資源連携事業

【中長期アウトカム】困難を抱えたこども若者が孤立を感じない地域・社会になる

2020/4　2020/10　2021/4　2021/10

コロナ感染拡大　長引くコロナ

Project 01　食の循環システム構築事業　フードバンク信州

長野県内において、企業等の食品寄贈を推進するシステムがより整備され、地域の支援のネットワークとの連携が進むことにより、地域の貧困が軽減される。

- 2020/4～ コロナ禍における食糧支援ニーズの期待、高まり
- 保管倉庫
- 2020/7～ コロナ対応子ども応援プロジェクト開始（制度の狭間の貧困層）
- 2020/12 県経営者協会食品部会代表企業とシステム化について協議
- 2021/1 第１回システム検討会議開催 参集団体：経営者協会、企業、県社協、県労福協、行政
- 2021/8 長野県商工会議所連合会に企業調査協力依頼
- 2021/9 「長野県フードバンク活動関係団体連絡会」の設置（12団体）
- 2021/9 キントーンによるシステム構築を検討 県社協と連携、県連絡会サイトと連結構想
- 2021/10 「企業のフードバンク活動についてのアンケート調査」実施食品関連企業812社

Peoject 02　ＩＣＴ学習支援官民協働事業　銀のかささぎ

千曲市地域を構成する住民、屋代商店街や企業、千曲市教育委員会など様々な資源とつながり、子どもたちを支える。

- 地域団体とキックオフ、IT教室開始 関係団体へ挨拶
- コロナでオンライン学習の需要が高まる
- iPad・PC、オンライン学習機材、ビデオカメラ購入
- GIGAスクール開始 chromebook10台導入 メンバー間で研修
- ぷれジョブ・はみんぐICT学習の相談zoomMTG設定
- にっこりひろばグレーゾーンの子どもへの学習支援、教頭先生より感謝
- オンラインMTG 子どもの居場所とつなげる（4ヶ所）
- コロナの蔓延で、アウトリーチとオンライン学習に切り替える
- 伊那市ハミングへ視察し、休眠預金事業について情報共有をする
- 各種オンライン講習順調に開催
- オンライン学習、特にプログラム等の講習に参加するのは、netリテラシーの高い家庭の子ども、つまり貧困、課題を抱えた家庭葬へは届いていない

Project 03　地域巻き込み型共生社会の実現　Gland・Riche

安曇野市及び周辺市町村において、困難を抱えた子ども若者及びその家族、高齢者が、ワサビ、生薬による農福連携により、社会参加の機会と収入を得る就労につくことができ、農業従事者の担い手不足、荒廃農地問題も解消された地域・社会になる。

- アウトリーチができる人の養成がコロナの影響で進まない
- わさび業者との連携
- コロナ渦 ワサビの売り上げがなかった 生薬視察行けず
- 小林農園と連携し玉ねぎの栽培
- 引きこもりアウトリーチ支援継続
- コロナ禍で農福連携の種目変更 菊芋、陸わさび→玉ねぎ　芍薬畑拡大
- 子育て支援機関連携、安曇野市、社協
- コロナによるハウス等農業資材の遅れ顕著
- 農福連携で引きこもり支援への問い合わせ、体験、見学増加
- 利用者にヒアリングを行い 働く時間や曜日など調査
- 協力農家との連携・理解により、働きたい時間にできるだけの作業をし、働いた時間を記録すること、時給が支払われる。新しいい仕事の仕方・仕組みを構築。それにより、利用者が持続的に働くことが出来るようになった。

Project 04　生きづらさのある市民の居場所づくり　ぷれジョブ

小海町を中心とした南佐久地域において、困難を抱えた子ども・若者とその家族を含めた地域住民が安心と安全を分かち合う『拡大家族』となることから、この地域全体に『共創社会』が実現される。

- 町長、役場、商工会、商店街等事業説明
- 8/22 キックオフ映画上映会＋対話会　役場会議室
- 町長が小海駅舎に来訪ハード面の環境整備について視察
- 駅舎内、内装工事と環境整備を完了
- 南佐久郡内特別支援教育コーディネーター連絡会に参加
- 2020/12 小海中学校生徒担任と駅舎ドアにイラストを描く
- はぁーと工房ポッポ認知症当事者ミーティング 豊里薬局「漢方カフェ」
- 2021/7/19 小海高校美術班シャッターペイント
- 7/19～8/5 Artsポテト展覧会
- ささのや・地域興し協力隊員と西馬流商店街の町歩きマップ
- 不登校生徒の駅前居場所支援 志望校見学

Project 05 働きづらさ解消に向けた支援事業　ふくろうSUWA

引きこもりの若者、生活困窮者、障害が窺える等生活に困難を抱える人々が、一般企業や団体に定着就労出来るようになり経済的向上が見られ地域社会で暮らせるようになる。

- 遺贈における土地取得 弁護士と相談、賃借へ
- 県、市役所担当部署説明、社協、企業周り、ハローワーク
- しいたけハウス機材遅れ
- 協調融資諏訪信金と面談。長野信金とともにクラウドファンディング打合せ
- 居場所建設費寄付募集
- シイタケハウスでの収穫までは、ふくろうSUWA本部で手伝い
- 子ども、若者の引きこもり予防と情報交換のため、諏訪圏域こども応援プラットフォームと連携構築
- シイタケ収穫開始 居場所も完成
- 5/10 シイタケハウス開所式 しいたけ出荷
- 事業指定プログラム実施 47万円余りの寄付が実現
- 2021年４月から2022年1月までに7名が利用開始。そのうち１名が企業に体験実習、1名が一般企業に就職、1名復職、1名B型に移行

Project 06 子どもの居場所とネットワーク推進事業　子ども・若者サポートはみんぐ

引きこもりの若者、生活困窮者、障害が窺える等生活に困難を抱える人々が、一般企業や団体に定着就労出来るようになり経済的向上が見られ地域社会で暮らせるようになる。

- 居場所「オルタ」alla(アルラ)でOpen スポーツ、特別支援、ピアスタッフ参集
- ホームページ作るもネットワーク稼働せず
- 多様な居場所 調理・アート・ボードゲーム・イベントモノ作り教室・アート体験・小物づくり
- コロナで体育館使用できず
- 屋外＋スポーツ コロナの閉塞感が屋外のストレス発散で子ども達が生き生き
- 多様な研修 リカバリーカレッジ 10月オンライン研修 ゲーム：母親とヒアリング
- 利用者の増加
- 屋外における居場所の提供定例化（広場、焚き火、アスレチック等）
- ゲーム、タブレット等インターネット、ITとの付き合い方
- 多様な研修 アドラー講座 不登校の子を持つ親の会 コミュニケーション講座
- 理念体系づくり講座 ワークショップ参加 クラウドファンディング研修

Project 07人形たちとつくるコミュニティスポット　いいだ人形劇センター

飯田市・下伊那地域において、困難を抱えた子ども・若者が自らの考えで積極的に行動できる地域・社会になる

- 居場所 ほっこりオープン 毎火曜、木曜 飯田駅裏一軒家
- 幅広い層へ声掛け 高齢者 不登校等
- 対象の方向性の修正 曜日によって、高齢者、高校生、子育て世代
- 想定活動は集う［計画→コロナで延期または休止］を繰り返す
- 「足の便」「集う」からオンライン、アウトリーチへ
- 動画制作WS開催
- プラットフォームとつながる
- オンラインで（アウトリーチに）子どもの居場所とつなげる
- アウトリーチをトライアル
- 第三の居場所ゆめひろ訪問
- 小学生Youtuber
- 音楽と人形劇のミニライブ
- 拠点の近くに駐車場を無料で貸してもらった

【中長期アウトカム】困難を抱えたこども若者が孤立を感じない地域・社会になる

資金的支援

1. 居場所において、安定した食事提供、学習支援提供を行うことにより、日常生活を送る上での重層的な困難を軽減する。
2. アウトリーチを「参加」につなげ、居場所への来所機会を増やすことにより、地域からの孤立を感じない社会になる。
3. 作業工程数を増やし（ワークシェアリング的考え方）、就労機会の増加を図ることにより、地域からの孤立を感じない社会になる。
4. 高齢者の活躍の場を創出し、地域内で高齢者が「担い手」となる。

非資金的支援

5. 長野県において、実行団体に対してインパクト・マネジメントを行うことにより、地域内での協力者・賛同者が増える。
6. 長野県において、実行団体に対して地域産業に関する専門スキルの支援を行うことにより、地域産業の新たな担い手を育成する。

非資金的支援 伴走支援

コロナ対応への支援（緊急助成の使い方）

- コロナ感染症拡大に伴う事業遂行の困難に対応した相談、助言
- コロナ禍の農福連携影響大→事業変換支援
- 対面学習からオンラインへ移行 機材補填

接続支援　連携支援
- 異なる分野をつなぐ

連携支援　アウトリーチ提案　連携支援
- 経営者協会等県内主要ステークホルダーとの環境づくり
- 対面学習からオンラインへ移行 機材補填

接続支援

環境支援
- 県次世代サポート課へ県内フードバンク団体の情報共有の必要性、重要性を提言

事業強化支援
- 県社協との連携構築を画策

相談支援　事業改革支援　環境づくり支援
- 講習、連携、アウトリーチは進んでいるが、困難を抱える対象者へのリーチができていない。対象者のいる場所へアウトリーチを提案　接続

地域ステークホルダーとの関係構築支援

連携支援
- 行政、民間等関係団体連携環境づくり

事業支援
- 遺贈寄付の土地（農地）取得の困難を助言

事業支援
- 対象者へどう接続するか 対象者の見直し

連携支援
- コロナ禍もありネット上の居場所づくりをめざすがうまく行かない　現場重視へ助言

事業支援
- 対象者へ到達へ悩む コロナの深刻化が追い打ち

事業支援
- 信金CFと被らない寄付募集検討 居場所づくりでプログラム開発

事業支援
- 他地域の子ども支援団体に人形劇と関われる機会を作ることを提言

事業支援
- 居場所だけでなく野外での体験を提供する意義を明確化することを助言

事業支援
- 初期事業計画の緊急見直し

連携支援
- 茅野市以外の子ども若者支援団体との接続

事業支援
- 他地域の子ども支援団体に人形劇と関われる機会を作ることを提言

環境支援
- つなぎ資金相談

連携支援
- アウトリーチを提案 子ども支援団体ZOOMミーティング設定

環境支援
- 芸術と福祉、芸術と駅前活性化　開支援

環境支援
- HPを活用したネットワークの構築相談・IT活用支援団体紹介

環境づくり支援
- 子ども支援団体を人形劇に招待・ワークショップにも参加

事業進捗支援
- ワークシェア的な働きができる環境づくり

事業進捗支援
- 福祉視点から観光視点を加味する提案

経営支援
- 経営感覚の乏しい団体に若い後継者が登場 経営感覚育成支援

子どもの居場所団体の紹介　Zoom会議開催

生まれたアウトカム

- 新型コロナ感染症の急拡大、緊急事態宣言発令等に対し、実行団体それぞれの事業内容の相談・検討・実行
- 各事業のアウトカムに照らし合わせたコロナ対策による事業手法の変更、計画の見直しができた
- 困難を抱えた対象を支援する居場所を作る。が、それぞれの事業の出発点であったがリアルに「集う」ことができない状況下で成果達成への道筋を支援

事業運営/実施支援　コロナ禍の対処

- 資金的支援で想定していなかった事業
- クラウドファンディングを活用した資金獲得
- 休眠預金資金にプラスの民間資金を投入することで事業の強化、事業への市民参加意識を醸成する

資金調達支援

- 実行団体の力量では対象者へ支援が到達できない、少ない
- 対象者分野の団体と連携することで、事業対象者への接続点が増えた
- みらい基金の既存関係組織、伴走支援関係者からの協力で、対象支援者に近い団体をつなげる

ネットワーク形成/CI促進支援

- コロナ禍でより対象者が見えない、つながらない状況が生まれる
- 対象者のいる場所、Biotope=生息域に出かけていくことで接続できた
- 居場所で待つ、からアウトリーチする支援を提案し、コロナ影響をプラスに転じさせる

事業運営/実施支援

- 実行中の事業が思うように進捗しない、手応えが生まれない
- 対象者への到達の仕方、活動の仕方をチェックし見直す
- 伴走支援として、ともに考え、悩み、事業をその都度見直し、改善へとつなげるPDCAをする→障壁ごとに評価

事業運営/実施支援

4.事業の実績　インパクト年表②

事業実施
伴走支援
アウトプット

Chronological table of impact

2022/4　2022/10　2023/3

中間評価

- ・食支援の見える化への進展
- ・未連携関係団体との接続
- ・グレゾーン支援へ
- ・県全域連携構築へ

フードバンク活動の拡大・全県展開

県社協との連携活動
食料支援を通して支え合いの地域づくりにつなげるために県社協との協働活動を具体化した。

2022/12
長野県フードサポートセンター設置
長野県と食品小売企業、支援団体が協定し、食料の需給調整を行うセンターが稼働

プロボノ支援
PwCあらたと接続
組織運営、業務の流れに対して提言を受け、法人運営の強化を図った

- ・アウトリーチとリアルのハイブリッド講習
- ・オンライン学習不登校支援

ひきこもりがちな若者への就労支援のための講座を商工会議所へ打診したが、開催NG

2022/7～8
夏期講習で、算数教室、英語教室など無料学習塾を行い多くの子どもたちが訪れる

市長、市議会議員、県議会議員訪問

NHK貧困家庭の学習支援取材、教育格差の是正

ボランティア増加
企業連携打診増加
プロボノ
寄付増加

中部:東海及び北信越地区の主管組織になる

2023/２～
児童養護施設 恵愛でＡＤＨＤやＬＤを抱えた子どもへの学習支援

- ・属人的支援であるアウトリーチの人材育成が困難
- ・農家、業者連携が育つ
- ・農業体験、就労が育つ

相談件数　延べ130件
相談内容　引きこもりの解消、生活悩み相談、就労支援、子育て、介護相談

作業所及びトイレ付きワサビの農場２か開設。
生業栽培は人手足りず。
８名の若者

廃止されたJA支所の施設を借用。地域住民への障害者、ひきこもりなどの課題提示

当事者「生きづらさ」を、医療支援、学校との介入、就労の体験と、多様な課題を当事者の生活レベル全体を底上げしていく支援を行う。

連携先の拡大
医療機関、障碍者総合支援センター、社会福祉協議会、市町村。

- ・不登校児の居場所
- ・芸術と居場所の接続
- ・小中高生との接続
- ・駅前賑わい創出

小学生の街の現風景写真展への参画

少年、美術館の展覧会、イベントに参加

9/13～9/16高原美術館「浮田要三ときりんの世界」展示共催

「えきノまちあい室」
居場所、暮らしの保健室、ぽっぽによる障害者社会参加の継続

シャッターペイントをした美術班員が町の美術館で展覧会

小海小４年生生徒撮影による写真展を駅舎で開催

- ・就労への問い合わせ増加
- ・地域企業、実習・体験協力体制整備
- ・就労訓練施設稼働。
- 当初６名２名が卒業

相談が、8050問題を抱える40代から50代以上が主体となる

行政窓口からの紹介増

就労場所となりの居場所作は、利用当事者に認識され、就労しなくても利用

一般就労、復職、福祉サービス移行、起業、他の居場所に移行と多様な出口

B型に移行したがなじめず、ふくろうに戻りたい希望。

無理に卒業せず、対象者にあった就労形態を提供する（ワークシェア的就労）

無理に卒業せず、対象者にあった就労形態を提供する（ワークシェア的就労）

- ・ICT体験のバランスが重要
- ・地域内の居場所運営者との連携強化
- ・対象者への接続

多様な体験提供
プラネタリウム
焼き芋大会
高遠歴史散策
マレットゴルフ

人形劇体験

伊那まちBASE「かぞく食堂」(子ども食堂)立ち上げ支援

駒ヶ根森カフェ月２回

駒ヶ根市教育委員会との話し合い(森カフェ継続に向けて)

子どもたちの利用増
スタッフの増員

子どもたちの動画教室(全5回)受講
生12人(子3人)・ユーチューバーから学ぶ動画

伊那ｹｰﾌﾞﾙﾃﾚﾋﾞ
ユーチューバー登場
HPのリニューアル活性化なる

居場所継続
教育委員会との話し合い
サポーター募集

- ・拠点活動とアウトリーチのハイブリット活動
- ・人形劇×音楽×体験
- ・対象者の確認と拡大

12/2,10　Hug
アウトリーチ
人形づくりWS
&劇体験

人形劇提供

3/22
アウトリーチ
バトルダッククラブ　人形劇公演

5/11
アウトリーチ
人形づくり一般
社団法人おもちゃの木

Hugとの継続連携

8月8日～
ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ 武蔵野大/ｲﾝｽﾀ開始

Hug　絵画展示
いいだ人形劇センターギャラリー

11/23
アウトリーチ
丘のりんご　太陽学園
人形劇公演+体験

事後評価

企業連携の確実な進展
地域の支援拠点の拡充
全県ネットワーク展開拡大
食の見える化システムの活用範囲の確定

行政からの学習支援受託・企業支援
事業の他地域への展開
駅前旧ホテル跡地に経典整備
広報活動による多様な支援受託

引きこもり支援の担当者の拡充が課題
農副連携：貧困家庭、ひきこもり、高齢者、障がい者等の就労支援の達成
陸わさび等新規事業の収益性事業へのテイクオフ

県の委託、分院の新院長の確認、ポッポの確認を得て、「えきノまちあい室」の継続へ
小学校や美術館など他機関との連携を視野に入れた「福祉と文化」今後の運営を提示

就労体験、場所が稼働、連携先企業、パート、B型、起業、ふくろうに就労等多様な就労形態、先へ
行政、社協窓口との連携により見学面談増

居場所、森カフェの安定した運営
ネットワーク促進とHP活性化
地域の新たな居場所とのさらなる連携強化

アウトリーチ
人の集まるところで演じる作品を計画
出口戦略(商品化)　人形劇をﾊﾟｯｹｰｼﾞ化
商店街で地域をまきこんだ人形劇WS

みらい基金伴走支援総括

システムの実装とそれを支える基盤づくり→企業連携→運営主体の協業事業継続→起業・行政・社協等他ステークホールダーの巻き込み

行政連携の充実・団体間連携支援による横展開・連携の充実
アウトリーチ支援とリアル支援のハイブリッド事業への展開支援

引きこもりアウトリーチ人材育成
担い手育成と収益事業の両立
経理総務等基盤強化支援と農業指導

対象者の掘り起こしを進めるため、関係機関との連携を深める。福祉部署へのアプローチが、観光、文化：美術館との連携事業を提案し実現。

若年層引きこもり対象を8050層へ拡大提案
体験就労から就労先へ送り出しを改め、ふくろうに常勤、パート等多様な働き方を提示

自己資金相談　CF提案
体験格差の数値化　種類・参加人数
子ども、関係者などの変化、エピソードの提示
横連携、多　機関連携（芸術分野）

事業化への資金検討
アウトリーチへの提示
芸術と福祉の連結→県文化政策課への提言（アーツカウンシルと連携（助成金獲得）

中間評価の視点

- ・対象者への到達の確認
- ・到達への手法（設計）の確認
- ・自団体の事業領域の確認
- ・事業の進捗と質の確認

行政支援ではできない柔軟な働き方
ワークシェア的なフローの提案

居場所での支援と
アウトリーチ支援のハイブリット

横連携で対象者を拡大し
もっと対象者にアプローチしていく

事業強化支援
若年層より中高年の引きこもりのほうが経済的危機感があり、これまでの若年層メインから中高年へターゲットを広げることに

事業強化支援
新しい農作物の導入や、農地換地・肥料などの提案

事業強化支援
県社協との連携構築実施

事業強化支援
全県展開、連携

相談支援
出口戦略
団体の継続支援

基盤強化支援
JANPIAとの協業
事業全体の整理、重点項目の抽出

対象者掘り起こし検討（アウトリーチ）

事業強化・連携支援
共通の対象を持ち、異なるスキルを持つ団体を結びつける

事業強化支援
多様な居場所の継続支援

事業強化支援
他の利用者へのヒアリング、同様の傾向があり、一般就労に無理に移行せず、自分に合った就労（ワークシェア的）ができるようにすることを最優先することとした。

事業継続支援
行政からの受託
地域組織との出口連携

事業強化支援
多様な体験提供を事業の核に提言

環境づくり支援
横連携構築
子ども支援団体を人形劇に招待・ワークショップにも参加

基盤強化支援
JANPIAとの協業
多機関連携

事業継続支援
行政、シニア大など、地域組織との連携

実行中の事業が思うように進捗しない、手応えが生まれない ▶ 対象者への到達の仕方、活動の仕方をチェックし見直す

伴走支援として、ともに考え、悩み、事業をその都度見直し、改善へとつなげる
PDCAをする→障壁ごとに評価

事業運営/実施支援

自団体の領域での事業の行き詰まり。次のステップへの展望が見えない ▶ 実行団体では繋がりにくい、行政、ステークホルダー等へ繋がる

事業のアウトカムをより大きくするための異なるステークホルダーへの接続を支援
→出口戦略への布石

環境支援
ネットワーク形成/CI促進支援

事業継続、アウトカムの普及効果、提言の相手、方法など難易度が高い ▶ 行政窓口、企業連携、横連携、プロボノ等の実施による出口戦略

運動の発展、社会的認知、制度化
(参加者拡大、法制化・公的支援化

普及啓発/ アドボカシー促進支援

事業開始時

資金的支援

1. 居場所において、安定した食事提供、学習支援提供を行うことにより、日常生活を送る上での重層的な困難を軽減する。
2. アウトリーチを「参加」につなげ、居場所への来所機会を増やすことにより、地域からの孤立を感じない社会になる。
3. 作業工程数を増やし（ワークシェアリング的考え方）、就労機会の増加を図ることにより、地域からの孤立を感じない社会になる。

非資金的支援

4. 高齢者の活躍の場を創出し、地域内で高齢者が「担い手」となる。
5. 長野県において、実行団体に対してインパクト・マネジメントを行うことにより、地域内での協力者・賛同者が増える。
6. 長野県において、実行団体に対して地域産業に関する専門スキルの支援を行うことにより、地域産業の新たな担い手を育成する。

事業終了時

資金的支援

1. 居場所→アウトリーチ支援と併用することでアウトカムへシナジー効果を生んだ
食事提供はフードバンク事業において向上。学習支援に多様な体験が加わり、より重層的な困難を軽減できた。
2. アウトリーチ支援人材育成においては、属人的な障壁を越えることが難しかった。
畑やしいたけ小屋など多様な居場所の創出で、地域参加の機会が増え、地域に理解が進んだ。
3. 時間的、空間的に対象者に合わせた働き方を創出し、就労機会の増加を図ることができた。
地域（農家）の理解、協力が進み、地域共生の小さなモデルが生まれた。

非資金的支援

4. コロナ禍において高齢者の参加が望めない状況があったが、農業、体験、学習支援においては、地域内で高齢者が「担い手」となり、活躍の場が生まれた。
5. 全県の食支援の官民のネットワーク構築、中山間地での福祉的な居場所と文化、商業が結びついた。
地域の人々、企業、行政を巻き込んだ多様な体験を提供できる地域が生まれた。
5. 信州の農業と福祉が接続され、これまでの就労支援では対応できないグレーゾーン支援が生まれた。
農作業の切り分けを生み出し、引きこもり等のこれまでは労働力と認知されなかった人々が、働く喜びを享受し、社会参加のモデルが生まれた。

4.事業の実績　非資金的支援内容の数値化（支援カウント）定時経理進捗管理等除く

みらい基金における伴走支援をカテゴライズし（多摩大小林先生資料、レビュー会）各実行団体年表より数値化していった。実行団体、その事業、時系列によって支援内容の濃淡があったが、事業運営、実施支援が半数を占めた。

社会課題解決

事業運営/実施支援　69

FB信州	20
銀のかささぎ	5
ぷれジョブ	10
グランドリッシュ	9
ふくろうSUWA	9
はみんぐ	8
いいだ人形劇	8

組織基盤構築

経営基盤構築支援　21

FB信州	3
銀のかささぎ	3（経営戦略）
ぷれジョブ	3
グランドリッシュ	5
はみんぐ	7（経営戦略）

資金調達支援　13

FB信州	1
銀のかささぎ	1
ぷれジョブ	1
グランドリッシュ	3
ふくろうSUWA	3
はみんぐ	2
いいだ人形劇	2

環境整備

モデル形成/SI支援　3

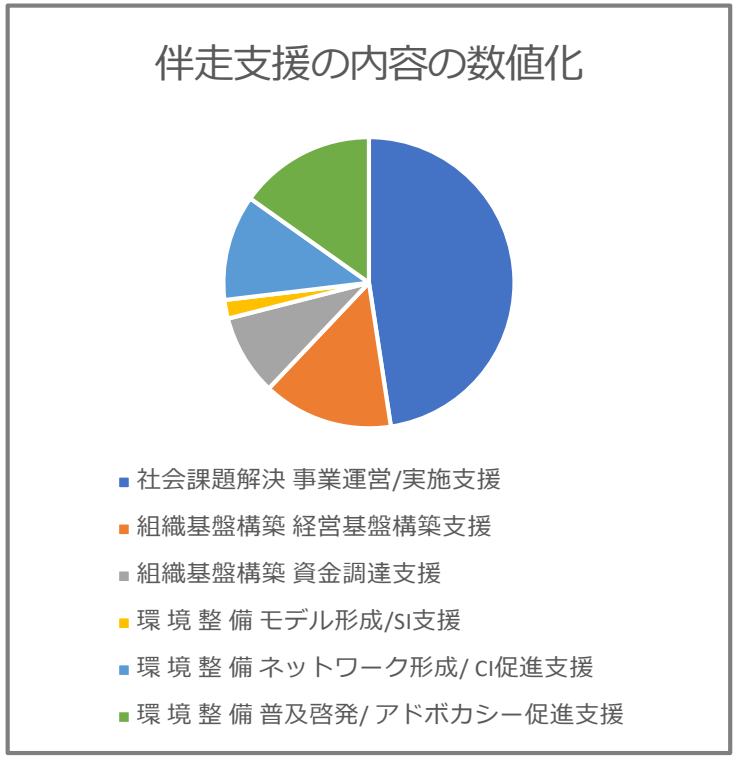
ぷれジョブ	1
はみんぐ	1
いいだ人形劇	1

ネットワーク形成/CI促進支援　17

FB信州	2
銀のかささぎ	3
ぷれジョブ	3
ふくろうSUWA	1
はみんぐ	2
いいだ人形劇	6

普及啓発/アドボカシー促進支援　22

FB信州	4
銀のかささぎ	3
ぷれジョブ	3
グランドリッシュ	3
ふくろうSUWA	3
はみんぐ	3
いいだ人形劇	3



4.事業の実績

特筆すべき活動（年表参照）アウトプットの実績　外部との連携の実績①

７つの実行団体の年表とみらい基金の年表から、伴走支援の分類、質を分析、抽出していった。
年表の時系列から。支援内容が変化、成長し、アウトカムへの道筋を視覚化した。

●対象者、支援分野での実施事業への伴走支援の方向づけを行い、以下のように分類した。
農福連携＞グランドリッシュ　ふくろうSUWA
居場所創出＞銀のかささぎ　ぷれジョブ　はみんぐ　いいだ人形劇
エコ・システム創出＞フードバンク信州

●事業進捗、障壁に対応した運営／実施支援
スタート時の環境づくり→行政窓口、関係団体への連携構築支援
→全事業
コロナ感染症対策支援（非資金的）
→居場所づくり（集うこと）が中心の事業で集えない状況での対策、変更
→障壁に対して共に検討、提案し打開策を生み出す
居場所を屋外へ　はみんぐ　→居場所の多様化
対象者のいるところへ支援を持っていく→アウトリーチへ
引きこもり相談窓口→訪ねていく
スタート時の資金的支援では賄えない活動領域へのクラウドファンディング支援（非資金的）
→ふくろうSUWAの居場所小屋作り
専門領域のテクニカル支援（非資金的）
→フードバンク信州の食の見える化システム構築
対象者への到達を加速、増加する非資金的支援
→異なる分野で活動する団体をつなげる（環境づくり）
ICT学習支援⇔子どもの居場所　銀のかささぎ　はみんぐ
人形劇⇔引きこもり支援団体＋地域ネットワーク

4.事業の実績

特筆すべき活動（年表参照）アウトプットの実績　外部との連携の実績②

それぞれの事業の課題への非資金的支援を年表から抽出した

●事業進捗、障壁に対応した運営／実施支援

●障壁に対して共に検討し打開策を生み出す

①対象者に思うように到達できない　ふくろうSUWAへの非資金的支援

→事業途中で再度、事前評価項目である「対象者の分析」へ立ち戻る

問い合わせが若年層より中高年齢層が多いことを発見

→対象者へヒアリングを提案

ヒアリングから若年層引きこもり者は経済的危機感が少なく、家族もまだ働き盛りで、無理に外に出してトラブルに成ることを選ばない。

8050問題である中高年齢層の引きこもりは親も介護や死去があり、経済的な危機感を抱く、就労、社会へ出るきっかけ、意識が生まれる

→中間評価時に事業対象者に中高年齢層の引きこもりを加え、対象関係の行政、社協等窓口へ周知することとした（対象者の変更）

②就労支援をめざしたが利用者が戻ってくる

→体験就労から、企業やB型へ橋渡しをする事業設計だったが、卒業した利用者が帰ってきたいと望んでくる事例が多い

→自団体が持つワークスペース、あるいは体験作業所に滞留することも可能とし、多様な働き方を提供することにした（事業計画の変更）

③就労意欲はあるが、時間的対応ができない　グランドリッシュへの非資金的支援

朝起きることができない→作業が始まっている→出勤を諦める→休みグセ

引きこもりの子たちのこれまでの一日を検証、夜間のゲーム、ネット等で就寝時間が遅い。

無理に朝起きることを強要しない働き方はないか？

農福連携圃場の隣の農家が活動を理解してくれ、玉ねぎ畑の雑草取りをある程度の期限をかぎって、いつでも作業をしていいことにした

→圃場入り口に個人個人の出勤記録をメモし、賃金台帳にする

引きこもり系の若者が働ける場ができた

新しい農業の担い手が生まれた（予兆）

4.事業の実績

特筆すべき活動（年表参照）アウトプットの実績　外部との連携の実績③

それぞれの事業の課題への非資金的支援を年表から抽出した

●事業進捗、障壁に対応した運営／実施支援

●障壁に対して共に検討し打開策を生み出す（非資金的支援）

④引きこもり、学習遅延。しょうがい者支援　駅の居場所事業

インパクトが思うように生まれない

→そもそも対象者が中山間地で絶対数が小さい

引きこもりの子ども若者が変化し就労へと成果が出るが絶対値が少ない

→中山間地の町行政、社協等が保守的な傾向が強い

→地元民以外への警戒心

→病院連携の駅の保健室、障害者支援施設の触れ合いの場（パン販売）など

は賑わい創出として、駅周辺商店街で理解が深まる

↓

居場所シャッターの装飾＝ペインティングを町の障害を持つ子どもたちが行う

駅前を小学生の写真展の発表の場にする

→町の美術館　学芸員とつながる

→町の資源再発見をめざすNPO等とつながる

↓

福祉のみの領域活動でなく、文化領域、賑わい創出へと事業を拡大する

（事業計画の変更）

●事業進捗、障壁に対応したネットワーク形成/ CI促進支援

●障壁に対して関係性構築、支援者投入により打開策を生み出す（非資金的支援）

⑤全県的なネットワーク構築、企業連携、行政連携、多機関連携が進まない

資金分配団体の人的資源を活用、経済団体、県担当部署、県社協等への働きかけ

→全県連携組織の発足

→全県組織の中核ポジションに

→県社協との接続で事業遂行力の強化

→事業継続力の補填

4.事業の実績

特筆すべき活動（年表参照）アウトプットの実績　外部との連携の実績④

それぞれの事業の課題への非資金的支援を年表から抽出した

●事業進捗、障壁に対応した運営／実施支援

●実行団体の活動内容の変更希望に対しての非資金的支援

⑥コロナ感染症の急拡大もあり、居場所運営にネットを加えた事業にしたい
ネットでの学習支援を加えたナット上の居場所づくり（休眠緊急枠もあり）
そもそもインターネットの素養のない団体→多様な体験で事業が軌道に乗り始めている
→ICT学習支援団体とつなげて難易度を学んでもらう
→体験のバリエーションを共に可能性を検討→屋外の居場所、スポーツの人気
→多様な体験を提供すr事を事業の中核にして展開→インパクトを生む

●障壁に対して共に検討し打開策を生み出す

⑦対象者に思うように到達できない　銀のかささぎへの非資金的支援
引きこもりの子ども若者へのICTを活用した支援
児童養護施設では対象者に到達できているが、コロナ禍で動けない
プログラミング教室など、安定して研修会を開催しているが、いわゆるITリテラシーの高い家庭の子ども達が参集（対象者そうでない）
教育委員会の連携もあるが思うように動かない
→アウトリーチを提案
引きこもり支援団体とZOOMミーティング　横連携構築　マッチング
→資金分配団体の支援先の子どもの居場所へアウトリーチを始める

⑧対象者に思うように到達できない　いいだ人形劇への非資金的支援
引きこもりの子ども若者への人形劇による支援
そもそもが子ども支援の経験がない→市内のこども支援関係と連携もあるが思うように動かない
→アウトリーチとメニューの多様化を提案
子ども支援団体とZOOMミーティング　マッチング
Youtube向け映像WS　音楽＋人形劇＋体験
→アウトリーチ先の引きこもりの若者の絵画展を開催

4.事業の実績

短期アウトカムの実績（年表参照）

実行団体の短期アウトカム

連携構築

アウトリーチ

- 事業の姿を多くの人が知る中で地域周辺の人の考えが変わる
- 新たなパートナーが生まれる事業のアウトカム対象が拡大
- 自分にあった働きかたで働ける居場所で新しい働き方が生まれる
- 連携でアウトカムが明確化し事業継続力が増す
- 分野を超えた連携で、境界域の課題が見え、アプローチできる

開かれたフードバンクシステム

資金分配団体の短期アウトカム

事業開始～中間評価時
TOC
短期アウトカム

地域内で居場所が根付き重層的な困難が軽減される	・多様な主体が関わる居場所が定着し多様な困難を抱えている子ども若者、その家族が支えられる状態になった ・居場所の継続力へは課題が残った
自殺、引きこもりなど課題を抱える子どものが減少する	・自殺率における若年層日本１は脱却 ・引きこもりに関しては、その対応をアウトリーチによる手法が有効であることが実証できた。 ・引きこもりが特殊な事例でないことを多くの人が認知した。
多様な状況の対象に就労機会が増加する	・多様な主体へ多様な就労の機会がることで、福祉から就労モデルへの変化を予見できた。 ・２次産業３次産業より１次産業、特に農業が有効であることが実証できた。 ・引きこもりが特殊な事例でないことを多くの人が認知した。
地域資源としての雇用が生まれる	・上記の農業資源による対象者への雇用が生まれる可能性を確認した。 ・システムとして雇用を継続するモデル形成までは至らなかった。
貧困が背景にある対象に食の心配が減る	・供給側の連携、食の循環システムができ、稼働した ・社会、経済状況の影響が大であるが、貧困層の食需要は増加傾向である。

TOCの実行団体のアウトカムに対応した資金分配団体のアウトカム内容
アンダーラインは資金分配団体としての課題

4.事業の実績

短期アウトカムの実績（年表参照）

事業開始時のアウトカム		事業終了時のアウトカム
1. 居場所において、安定した食事提供、学習支援提供を行うことにより、日常生活を送る上での重層的な困難を軽減する。	資金的支援	1. 居場所→アウトリーチ支援と併用することでアウトカムへシナジー効果を生んだ 食事提供はフードバンク事業において向上。学習支援に多様な体験が加わり、より重層的な困難を軽減できた。
2. アウトリーチを「参加」につなげ、居場所への来所機会を増やすことにより、地域からの孤立を感じない社会になる。	資金的支援	2. アウトリーチ支援人材育成においては、属人的な障壁を越えることが難しかった。 畑やしいたけ小屋など多様な居場所の創出で、地域参加の機会が増え、地域に理解が進んだ。
3. 作業工程数を増やし（ワークシェアリング的考え方）、就労機会の増加を図ることにより、地域からの孤立を感じない社会になる。	資金的支援	3. 時間的、空間的に対象者に合わせた働き方を創出し、就労機会の増加を図ることができた。地域（農家）の理解、協力が進み、地域共生の小さなモデルが生まれた。
4. 高齢者の活躍の場を創出し、地域内で高齢者が「担い手」となる。	資金的支援	4. コロナ禍において高齢者の参加が望めない状況があったが、農業、体験、学習支援においては、地域内で高齢者が「担い手」となり、活躍の場が生まれた。
5. 長野県において、実行団体に対してインパクト・マネジメントを行うことにより、地域内での協力者・賛同者が増える。	非資金的支援	5. 全県の食支援の官民のネットワーク構築、中山間地での福祉的な居場所と文化、商業が結びついた。 地域の人々、企業、行政を巻き込んだ多様な体験を提供できる地域が生まれた。
6. 長野県において、実行団体に対して地域産業に関する専門スキルの支援を行うことにより、地域産業の新たな担い手を育成する。	非資金的支援	5. 信州の農業と福祉が接続され、これまでの就労支援では対応できないグレーゾーン支援が生まれた。 農作業の切り分けを生み出し、引きこもり等のこれまでは労働力と認知されなかった人々が、働く喜びを享受し、社会参加のモデルが生まれた。

事業開始時のアウトカム記述に対応した事後評価維持のアウトカムの言語化
（多分にアウトプット要素もあるが）

5.アウトカムの分析

事後評価時の非資金的支援アウトカム評価（年表参照）

アウトカムにおける定量データを抽出した。前出の伴走支援の種類の定量との相似が見られた。最終年度に向けて、事業の周辺環境の変化（理解、協力申出で、参加など）が見られ、波及効果のアウトカムが形成されている。

【非資金的支援】

指標	目標状態	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
長野県において、実行団体に対してインパクト・マネジメントを行うことにより、地域内での協力者・賛同者が増える。	居場所を毎日開所することができるようになる。 協力者、賛同者の人数 近隣農家の理解、協力 商業者の居場所協力（貸出）の申出で	・コロナ禍において、休校、閉鎖など行政機関が閉ざされる中、対策を施しながら、また場所を屋外に移したり工夫をしながら居場所を開設したことにより、それぞれの地域でより孤立化しやすい困難を抱えた子ども若者、そしてその家族を支えることができた。 →地域内での居場所の増加　43 →体験の種類、回数の増加　37種類　744回 →学習支援の増加　120回 ・地域の民間業者や行政が居場所への協力が増えた →地域内での協力事業者の増加　41 →ボランティア、手伝いの増加　66 ・アウトリーチの支援を併用することで、より対象者の支援が届いた →アウトリーチ支援の増加　564回 →アウトリーチ支援の種類の増加　20種類

事業終了時の協力者、賛同者の数値

	ふくろうSUWA	Gland・Riche	フードバンク	ぷれジョブ	かささぎ	はみんぐ	人形劇	計
地域内での協力事業者の増加	3	6	220	5	18	6	40	298
ボランティア、手伝いの増加	0	5	81	3	19	12	5	125

長野県において、実行団体に対して地域産業に関する専門スキルの支援を行うことにより、地域産業の新たな担い手を育成する。	①希望者が全員作業にあたることができる作業工程数 ②長野県最低賃金以上の支払い これまでは福祉対象だった人々が労働人口、就労対象者としての働き方のモデルが創出された	・中高年の引きこもりへの支援が増加した。 ・体験就労における最低賃金以上の支払い ・対象者の埼葛リズムに合わせた業務配分、割当、選択により引きこもり系の若者が働ける場ができた ・新しい農業の担い手が生まれた →就労支援に結びつく人の増加　20人 →就労支援の種類の増加　6種類

5.アウトカムの分析

事後評価時の非資金的支援アウトカム分析（年表参照）

バラエティ型の資金分配団体としての、非資金的支援により生まれた実行団体のアウトカム総和と、共通項（横串）における評価を考察した。

【アウトカムの達成度】

評価小項目	評価結果の考察
①実行団体の事業を通して資金分配団体が最終的に達成したいアウトカムは達成されたか	①実行団体の短期アウトカムは概ね達成され、それに伴う非資金的支援で生まれた資金的支援の相乗のアウトカム、非資金的支援から生まれた実行団体のみでは生み出せなかったプラスのアウトカムは豊穣であったと総括する。 資金分配団体のアウトカムは実行団体の事業成長プロセス（いくつもの活動→アウトプット）から生まれるアウトカムに非資金的支援の加勢で生まれた相乗のアウトカム、非資金的支援の加勢がなければ生まれなかった、あるいは、特徴的な（予期せぬ）創生のアウトカムとし、資金的支援、非資金的支援のアウトカムは達成された。 24P　短期アウトカムの実績 参照
②もたらされた変化は事業の実施に起因するものか	②年表に詳細に記しているが、この事業により、多くのポジティブな変化が得られている。
③資金分配団体が対象とする地域や分野等を超えて、同様の手法による取り組みが始まる兆候が確認されたか	③食事支援や学習支援、体験支援などを行っている団体を、他地域、他分野活動の団体等と積極的につなげ、それぞれのアウトカムの達成度を高める伴走した。 結果、協働、協業により新しい、多面的な取り組みが増え、想定しないアウトカムも生まれてきている。 例えば、引きこもりの中学生が、絵画創作から他団体案の展示会を一緒に設置、公開。 アウトリーチによる対象者への支援強化 自団体で話し得なかった対象者への支援の幅、深さが強化された それぞれの実行団体の強みを提供し弱みを補填する協業が生まれた
④事業実施のためのインプットに対して成果の規模や質は妥当であった	④インプットを資金的支援と捉えるならほぼ妥当。実行団体によっては、経理人材、専門家の不足によりインプットの活用に遅れが見られる事象もあったが、伴走支援でカバーした。 概して達成度は満足いく成果ととらえるが、高齢者の活躍においては、それぞれ実施事業においては達成度しているが、事業開始当初の高齢者の活躍が事業成果に相乗効果を生むパワーまでには至らなかった。 原因としては、コロナ感染症の影響が大きく、高齢者がこれら地域事業へ参加する環境が整わなかった。

5.アウトカムの分析

波及効果（想定外、波及的・副次的効果）（年表参照）

前述のように、居場所創出事業では大きな障壁となったコロナ感染症拡大であったが、それを乗り越える知恵を皆で出し合い、事業変革、戦略変更が、逆に、更にアウトカムを生む事業となったことは想定外であった

●想定外

コロナ感染症が想定外の環境の変化であり、障壁であった。
それを打開すべく、事業改革、変更、対象の確認をしていく中で生まれたアウトカムが「アウトリーチと居場所のハイブリット」である。
事業開始時、事前評価時点で対象者の分析において、引きこもり、軽度の発達障害者等へのアプローチの難易度は覚悟していたが、コロナ感染症でより居場所への誘引は難しくなり、苦肉の策でもあったアウトリーチが、結果として対象者への到達度の向上、誘引の丁寧さ、確立の高さにつながった。
また、待っていることでは生まれなかった、横連携でノウハウのやり取りが生まれ、事業者のスキル向上、スキル拡大が見られたのも想定外のアウトカムであった。

事業運営実施支援で行った、横連携は上記アウトリーチ支援と相乗効果を生み、団体間の協働・協業が想定しなかった、対象者への強い支援力、幅の広がりを生んだ。

また、コロナ禍が生んだ成果として、これまで居場所における支援としていた内容には、学習、食、ゲーム等遊びだったが、室内で密な環境を避ける、と盛んに叫ばれた命題から、屋外＝キャンプ、外アソビ、アスレチック、焚き火、マレットゴルフ、自然体験。体育館ではさまざまなスポーツ体験、そして、プラネタリウム、焼き芋大会、歴史散策、料理、ケーキ作りなど多様な体験活動につながり、子どもたちの非認知能力向上、連帯感醸成、地域社会参加の機運が生まれた。

5.アウトカムの分析

波及効果（想定外、波及的・副次的効果）（年表参照）

共通項の「横連携」と「アウトリーチ」は波及効果を生むエンジンであることを再確認した。

●波及的

想定外のアウトカムや、年表にも記しているが、「横連携」と「アウトリーチ」は、する側とされる側という関係性ではなく、共に事業をし、長所を出し合い、短所を補い合う効果を生んだ。

そして、それが横展開で影響し合う、波及的、相乗的にアウトカムを生み出す構図となった。

当財団が別事業で支援するフリースクール、松川町の「Hug」の不登校の中学生と、実行団体のいいだ人形劇」を人形劇体験で結びつけたところ、中学生の絵画の才能に気づいた実行団体が交流する中で、飯田市内のギャラリーで不登校生の絵画展を開催する、という想定外のイベントを開催できた。

ICTを活用した学習支援事業では、この事業を推進する過程で、当財団のパブリシティから、マスコミに取り上げられ、周辺地の行政からの委託事業受託、中部:東海及び北信越地区の主管組織になり、東京からのコンサルのプロボノ申し出等企業連携打診増加、寄付増加という出口戦略につながっている。

事業の効率性

効率性を経営的な視点に置き換えると、積極的な伴走支援は効率的ではない、と言わざるを得ないかもしれない。

当該事業、７事業それぞれへの伴走支援、専門領域研修支援、基盤強化等の支援、現地に出向いての支援、外部専門家の助力養成、関連機関への接続支援、ネットワーク形成等を総合すると、担当プログラムオフィサー3名、プログラムディレクター１名、経理担当補助1.5名、外部有識者4名という布陣での濃い密度において、資金的には効率性が高いと評価できるが、人的資源のコストとしては検討しなければならない（当財団として）

6.成功要因・課題

事業遂行には、資金分配団体と実行団体、そして対象者との対話、コミュニケーションが最も重要である認識しました

●成功要因

丁寧な伴走支援

実行団体との丁寧なコミュニケーション

- 心配があったらすぐに行く

  月例等での会話、相手の表情、関係者からの2次情報、対象者との会話などから、実行団体の状況を感じる。

  ここで言う心配は、活動などの事業進捗、アウトプット指標の差異ももちろんだが、POとしての直感、皮膚感覚的な部分を指している。

- それぞれの事業を共に進める気概と覚悟

  実行団体の事業を管理する立ち位置でなく、その事業の価値をしっかりと理解し、自分の言葉で話すことが出来、一緒に成功させようという思いが重要。

  事業を通しての関係だが、仕事の話だけをするのではなく、人間としての会話の丁寧さが重要（雑談をすればいい、というわけではない）

共感は必要だが実行団体との適切な距離感が重要

- 実施者である実行団体と同じ目線で感じ、考えることは重要で、一緒に悩み、喜ぶことと、事業を成功に進める、アウトカムを生み出すための助言（介入）や作為は、客観的な視点が必要。

  その助言が、上から目線、偉そうにならないようにする普段の関係性構築も重要。

  年齢的な上下感も注意して配慮する。（年下から目上への発言、その逆も）

プログラムオフィサーの状態（心得的）

- 諳んじて事業の内容、年度進捗、資金具合が言える
- 実行団体と同様に事業の意味や意義が理解され、同様の主体性、自分ごとになっている状態を保つ
- その上で、実行団体と異なる多様な視点、角度で冷静に事業、団体を見つめることで、具体的で、適切で、タイムリーな助言、行動が取れる
- 1団体　1.5人のPO　担当PO＋PD]（プログラムディレクター）体制づくり、厳しい

6.成功要因・課題

想定を超えるアウトカム、想定外のアウトカムは資金分配団体と実行団体の共同作業から生まれました。

●とくに社会課題解決に貢献したアウトカム

アートのちからを福祉分野へ接続した事業のアウトカム

→中山間地の小さな行政区での福祉分野事業、引きこもり支援の到達が難しく（後述の達成が困難であったアウトカムにあり）、大きな目的意識ではなく、居場所のシャッターのペイントを子どもたちにしてもらったことがきっかけとなり、地元美術館、小学校、高校の活動を結びついた。

→継続性、波及性が生まれた

農福連携における新しい働き方を提案、モデル化したワークシェア的ワークフロー開発

→事業計画にある、ワークフロー、作業工程の工夫はあったが、具体的な内容でなかった。コロナ禍で想定していた事業が開始できない状況で、対象者の仕事を隣接している玉ねぎ圃場の支援に切り替え、その農家の提案もあり、ある一定期間であれば、いつでも作業してｙい条件が生まれ、対象者の働ける時間に働くことで賃金を支払うフローが生まれた。

→想定していた事業でないところからアウトカムが生まれた

フードバンク活動を全県ネットワークに繋げた事業

→当初は独自にシステムを構築していく計画だったが、実行団体の組織基盤の弱さもあり、支援体制を模索、交渉し、県内のフードバンク事業者の連携組織が誕生、県内最大福祉組織、県社協との連携も生まれた。

→苦難から生まれたアウトカム

若者に焦点が当たりがちな引きこもり支援に8050の中高年引きこもり支援に光を与えた事業

→引きこもりの若者支援事業で、対象者層の思うような反応が少ない状況があり、中間支援時に対象の状態を再調査し、中高年層のニーズの高さ、支援の重要さに気づいて対象者層を拡大した。

引きこもり、軽度発達障害者へ多様な体験による非認知能力開発と支援モデル形成

→多様な課題を抱えた対象者へ、人形劇の持つ創作性、参加性、エンターテイメント性を提供する事業が、コロナもあり対象者へなかなか届かない状況があった。

別団体の子ども若者支援事業と接続することで、引きこもりの中学生の創作活動に繋がった。

7.その他深堀り検証

バラエティ型の助成事業として、評価軸を、明確化するため、共通項の抽出、伴走支援によるアウトカム（小林先生助言）の出現の見える化をするため、プロセスの見える年表づくりを評価の深堀りの手法とした。

●事業の進捗、経過で生まれるアウトカム（プロセス評価）をするため、実行団体と事業進行に沿った環境変化、介入、アウトプット、アウトカムを表す精緻な年表を作成（ディスカッション、ワークショップ、ヒアリング）し、評価の基本資料（集大成）とした。

8.結論

事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
事業実施プロセス				○	
事業成果の達成度				○	

自己評価に関する自由記述

● 事後評価を進める中で、2019年の自らの申請書に立ち戻り、その主題であった「解決すべき諸課題もそれぞれが密接、重層的に関係しあっている複数の課題」に対して、解決する方法も多様で重層化する必然があったと確信した。しかし、その課題解決はそれぞれの団体単一、分野の単一で取り組まれていることが多く、多様で多層な解決手段、体制が重要であることは、あまり顧みられていないように感じる。
今後の地域課題の解決に向けて、私たちが積極的に多様で重層化した支援体制を形作っていくことが重要であることを気づかせてくれた。
●また、評価資料として、映像コンテンツを作成しYoutubeにて公開予定です。

9.提言

事後評価を終えた段階で、

●当事業のアウトカムが、実行団体や他の団体との横連携を推進し、アウトリーチ先となることでコロナ禍の事業進捗の阻害を別のアウトカムに向かわせてくれた。
資金分配団体が意図する横連携はともすると、自発的でないやらされ感、無理矢理感を感じてしまう麺もある。
この事業では。繋がりやすい環境提供をしながら、作為的でない連携づくりをしてきた。
介入であっても、自発的な動きとなるような状況づくりが大事と感じている。

●実行団体の自発的な告知活動をより高める広報支援や、なかなか実行団体ではしにくい映像コンテンツ作りなどをすることで、実行団体のやる気や達成感を持ってもらった。

●資金分配団体としては、実行団体とともに、行政各部署とのチャンネルづくり、確保、信頼関係醸成が提言（アボカドシー活動）の要となる。

10.知見・教訓

評価報告書に記すことが妥当であるかはあるが

●休眠預金活用事業最初の“卒業”として、事前、中間、事後の評価の重要性は十分認識したが、事業はいわゆる“ナマモノ”で、思い通りのアウトカムを生む事業設計があるわけはなく、進みながら調整していく。対象者に到達しない。しても成果が上がらない。取り巻く環境の変化、例えば推進役の病気とか。
私たちPOはある時は、実行団体の緊急スタッフにもなり、ある時は不満や苛立ちの受け皿にもなる。時には険悪な雰囲気になることもある。
それでも共に進むには、臨機応変な伴走支援が重要で、月一回の定時ミーティングだけでは生まれない。
共通のゴールをお互いが認識し、それぞれの立場を尊重する。付かず離れずの距離感、お互いの信頼感が大切で、それは一緒に現場に身を置き、一緒に悩み、乗り越えることで生まれると思う。

2023年4月2日
公益財団法人　長野県みらい基金
高橋　潤